

であった。もう1つのオホーツク海プロジェクト関連として、猪上 淳(北海道大学)は大気混合層発達の様子を海水密度と寒気の強さ(海面温度との差)をパラメータとして関連付ける試みを行った。

南極域の研究として、鈴木香寿恵(都立大学)は1985年から89年の4年間に渡る熱収支解析の結果を紹介した。特に86年には南太平洋領域の南極半島を挟んで形成された波動パターンが1か月程度維持され、南極内陸に熱を運び込む役割を演じたことが伺えた。大気熱収支や気候変動を考える場合に、大気下端の境界面からの熱フラックスが重要な因子になるが、それは猪上ほかに指摘されるように海洋上では海水分布に大きく依存する。小倉知夫(東京大学)は、将来に大気海洋結合モデルにおいて海水分布と大気との熱的・力学的な相互作用を検討する目的で、海水の厚みと広がりとの再現を試みている。現在のところ、海陸分布の単純な南大洋では分布に関してはほぼ成功しているが、北極域では大気循環場の再現も含めてこれからのモデルの改良が必要である。広域の海水分布に影響をもたらす大気循環場としてブロッキングの例が、榎本浩之(北見工業大学)によって示された。榎本ほかは、強いブロッキングが形成された時に、南極大陸沿岸部では海水域が流され海面が開く様子を衛星データにより示し、それが大気への熱や水蒸気の供給を強化する可能性を指摘した。そうして大気に供給された水や熱は極

域にあるグリーンランド氷床や南極氷床の涵養/消耗に関わっているが、齋藤冬樹(東京大学)はAGCMの地球温暖化シグナルを大気側の境界条件として、Greenland氷床や海面高度の変動について数値モデルにより調べた。現状は大気側に一定条件を与えたままの計算であり、氷床が減ることを前提としたモデル設定となっているが、今後は大気へのフィードバックを含めた実験を目指している。

後半セッションの総合討論では、座長である浮田基郎(UMBC-NASA/GSFC)により雪氷圏と大気間の相互作用の観点からの討論が促された。その中で、中緯度などにおける観測結果や全球大気客観解析データ、数値モデル結果に比べると、極域大気に関する観測項目としてさらに選択・整理・強化していく努力が必要であることが指摘された。人間活動や工学技術的にも厳しい環境である南極、特に広大な内陸での観測には依然として大きな困難さがある。それでも水循環に関して言えば、内陸基地での越冬観測が実現したり、露点温度計や衛星センサーの最近の進歩を思えば今後5年から10年先には光明が伺える。

最後に、今回の専門分科会の開催を承認していただいた講演企画委員会、及び当日の会場作業に大変丁寧に対応していただいた実行委員会に対して深く感謝いたします。

平沢尚彦(国立極地研究所)

気象教育研究連絡会「岐阜県地域気象教育プロジェクト」のお知らせ

岐阜地方気象台では岐阜県教育委員会の協力を得て、インターネットを利用した気象教育プロジェクト「e-気象台&“こんにちは予報官”」を開始しました。教育の現場ではインターネットを利用した教育が多く取り込まれようとしています。岐阜地方気象台が実施しているプロジェクトを例に、今後の理科(地学)、特に気象分野におけるインターネット利用の教育について討論を行います。関心のある方は奮って参加してください。

なお、e-気象台のURLはこちらです。

<http://www.gec.gifu.gifu.jp/kyoukaHP/kishou/>

日時：2001年10月12日(金) 18:00~20:00
(秋季大会3日目)

場所：未来会館5F 大会議室(秋季大会C会場)

話題提供：鬼頭博尚(岐阜地方気象台)

稲川和仁(岐阜県恵那市立恵那北中学校)

田口雅夫(岐阜県可児市立西可児中学校)

澤井哲滋(日本気象学会)

教育と普及委員会委員長;

気象庁予報課)

進行：板東恭子(気象庁産業気象課)

担当：林 広樹(岐阜地方気象台)

Tel: 058-271-4108, Fax: 058-278-1633

E-mail: h-hayashi@met.kishou.go.jp

北島尚子(気象研究所)